



に改良的なるものであつたかも知れない。だからその中にほつきりと古田体制打倒の内蔵がある。斗争の過程の中で眞露がこれまで當局の学生の選考とは相入れない等は斗争の反省の継続的バリケードストライキを意識的に取り組むせる因となつた。最早一切の改良要求をも搖る取れなどいふことは大衆的に確実、明確に学生の斗争による古田体制打倒へとその斗争は進化したのである。しかしそれも風雲騒動などの勝利なくしてはありえないのである。そこで感性的にはあるが自分の置かれてゐる現状とのものなき問題に直面せば、いふことに認識させられたのである。そして東大斗争における日大全共争千の力をもつてこの参加は、帝國主義大學としての最も典型的なものにして存続していく。兩大学においてともにその解体を目指すものとして斗争が進む。されどそれが現に於いて「權力問題」を提起され得る地盤に到達したことには明らかだつた。そこで今、日大全共斗争は再び度々打倒の一環として、トド旗衆に向け政治斗争を再び地平を堅持しつゝ、西田体制打倒の斗争を、帝國主義大學日本ソダム体制の破壊をもつて革命派の秩序、大の解体をめざす斗争を、そしてそのことから得るアーリジニア教育秩序解体、アーリジニア支配体制解体に向け巨本體被斗争の一環としての大戦斗争を繰り返していくとする。とりもろあらず学生革命による左からの大戦斗争をめざす斗争を、そこそこそのことからくるアーリジニア教育秩序解体、アーリジニア規律を確立することなのである。全国においても、大学院立法を初めてとしてさざまな苟延、の政治的意図が高揚しているがこれらはすでに全国の全戦斗の政黨露顕、大衆意識を運びじての可能ことれたものである。

東大斗争においては、当初は医学部、インタークン制導の問題から出発し、それに対す る大學の不當廃除、機動隊導入自己批判とい う形で極めて改良的な要求から出發したので あった。しかしインタークン制といひまさに社会制の反映として現われてくる矛盾は個別 大学内に於いては決してじく鬼結し得ない要素を秘めこじたし、斗争等次の時計台突力封鎖 にはじまるアーリジニアの意識分離は明確に 東大学生としての基礎そのものを凝視せざるを えなくし、更には東京市立主義大學としてアーリジニアアシターのアーリジニアのためのアーリ

ショアジーの教育ではないという反対派、反権力的斗争へと進化させられたのである。それがどうしたこと因共リ民青、右翼連携派の争奪戦にもアベルトをもつてお头してさだし、加藤近代化路線をめぐる政治的闘争へと進化したのであつた。

今、金井斗に繰り返す「人々の大家」とのいはりで、ストライキを標記し、東京帝國工業大学解体の目的意識化して、斗争を本筋的に、しかも政府文部省の樹陰へ入場試験中止等ではなく、左から右のボッサム事件の報復を経じた成績が因縁をもつたのである。そしてこの東大一同十八、十九の決戦においては、國際警察の真向から右の対決区走勢を曉けて、半々足の立たず。さうに京大三ははじめとする全国の大學生も、その地平が広がり、大学斗争は華に躍進するものとして、はるく普遍的なものとして發展していく、たまつたりとした。それがだらう一月、二月、三月における國立農業大學の抗争、東洋大学の抗争、東京帝國工業大学の抗争等が、たゞうし、革命派の切り開いた地平は放送され余餘なく、さあだれがおつた。なにごとに、おれも最初に何かをやろうとすれば必ず中央の庄道がかけられるよう、苦難の道を歩むばかりとなかつた。

しかし大斗争においては権力問題が提起されると、何ことは資本主義体制の矛頭を明確にし、階級戦を強化し、政治斗争への積極的参加を可能にしたのであった。だから大斗争の後醍醐面にあつてもかわらず、西原・ニハといふ政治斗争においては、正圧的、全斗の隙列をもつて、斗争による可能にしたのである。たゞ、努力斗争・政治斗争の地平を意識して、すべくこの個別大学の矛盾を革命的立場にしていく、そして階級斗争の一途として、アーレ学生の分解と教育制度の解体をめざす大學生斗争の質が意識されて、ここにいたのである。

このように、金井斗運動は、突出した斗争、友の廉価な競争をかけによつて、目的意識化された。ナリとして、今までの全農協型といふ右翼連携から革命的左翼まで、関心をもつて、いよいよ人質から意識している人等までさすべく、この連合をしてしまつて、こすくての人の多教説に、そこ決定するといふ全農の危機感の、現在田夫・民青が反革命的に行つてこいるような階級

性ぬまでの全員の意見を反映させるという、反革命的な人達がなければその意見を反映せざるえないので、いかに大衆アスアス路線におちりて「こいへ由日共・社民も同じく議会内にありて効力を、地位を保つには大衆アスアスによるより他に手はない」という最早一切の階級社会隠遁してしまひ、資本主義体制内においてこそ存在できる長いといつて墮落したものになつてゐる。そして戦後一貫して反対したが如きの、思想的、政治的立場をもつてゐる者たるが、唯大衆を指導しえるものとして、実力斗争をもつて支配階級と対決さることにおける全戦斗運動は政治斗争とも扱ひきるものとして、否つきらねばならないものとして、階級斗争の一環としてすゞしく大學生等は位置づけられるのである。

(四)このようなボツタム体制に束縛されない全戦斗運動は、帝国主義者が右からボツタム体制の破壊をもつて再編成などとしているとき、革命的に左からの破壊をもつて我々の秩序、権力を準備していくのである。從つて支配階級は今や日本帝国主義の海外差羨を支はかるべく国内のあらゆる帝国主義的再編成を必要ならしめているとき、学生革命派によつて切り開かれた全国大戦斗争を、また未成熟なものとの間でともに、いかに状態にある。同時に大戦斗運動の裏が労働者人民の間にしみわたる、それが身動きができないという状態にある。つまり、その斗争の中に受けつかれてゐる。二年半戦争においては労働者の武装部隊が登場し、今全國的な政治状況の高まりとともに、力斗争の波が労働者階級の手に届き、その本來的な主導的階級としての役割りを果たそう。

としている。この時にあたつて見出した学生の斗いを孤立化させ帝國者本体より離れて謀りするは得なくしてゐる。學生革命派の策にいた斗争地平上に暴力的に圧殺すことに玄もってすゞかの階級斗争の压殺と計らんとしているのである。しかし階級が群衆を強め水は強めほどの革命勢力の名譽と不可分割のものとして大眾の運動勢と強固な意志の確立をもたらし、増々強固な革命派の戦線の組織化が熱気をもつて進められてゐる。日本革命斗争が現実めに進展し遂げてはるゝ右翼團体の組織化や、自衛隊による沿岸封禁更には革命派に対する敵底駆逐、長期勾留、不當大量逮捕、機動隊のテロリント等とまつて庄稼・消耗させようとしているのである。このよう辱めし階級攻撃こそ我々の斗いが前進していくことを認めざるをえなくなつてゐる延拡である。革命次第を壓殺する同時に日本帝国主義者の反革命策動も密々に進むらかに至るのである。日本帝國主義者の唯一の途徑としての海外侵略は、排外主義の反動宣伝の下に沖縄返還とくに軍事を藉り、アジア革命人民に敵討する形において進める水をこじらるゝのである。我々は激然な政権力とくらべを堅持し、敵略報の反革命策動を悉きにし大眾を大胆に決起させいかなければならぬ。

(四)我々にとってこの問題は一番重要で、我々の主体性をもつて日本階級斗争を押し進めてこいくつとも能動的に作用することができること因である。日本帝國主義が海外進出を目論み、そのためのあらゆる国内の体制づくりを暴力的に徹底しようとしている。そしてその反動に對して大眾の政治意識の高揚があり、六七年以來の実力斗争による政治暴虐、目論みの実力斗争が六八年中葉から八年初期にかけて最も激しくした大學生斗義において大學生たち水とそれをもつて權力問題へ政治斗争を挑むべき水の部隊として全員斗士が存在する。しかしうしろ大眾的な政治意識の高揚があるうち、そこを領導しうる核心部隊とならひに前衛部が確立したるものとして存在しなら

